

ミニオペラ あらすじ

福岡正信「いろは革命歌」完成記念ミニオペラ “ 大自然の歌 ” 台本・構成・演出 石多エドワード

優しい大自然

森に生きる様々な命たちが、大自然に感謝して歌っているところに旅人がやって来ます。

【空に浮かぶ雲たち】【風が飛ぶ朝】

旅人の優しい様子にいろいろな生き物たちが遊びに来て歌い踊り、大自然に感謝して歌います。

【青空高く】【ダンザンパン】【こんなに空が1】



青春

旅人は青年となりました。大自然の精たちと歌い合いながら心をつ一つにしてゆきます。

【僕は山へ】【この世界に】【山を歩めば】

ところが若い青年の願いとは別に、人の欲望はどんどん募り、自然から離れ、遂には自然を破壊してゆきます。そのため森の精は痩せ衰えてゆき切々と訴えます。旅人の自然への愛をどこに届けばよいのかと精たちが代わりに歌います。

【木を切らないで】【我らは豊かに】【この愛をいずこに】

静いが世界各地で広がりますが、ふと見上げた空にほんわりと浮かんでいる雲を見て旅人は思います。「世界に旅立とう、私の願いを分かち合える人がきつといるに違いない。」と。

【あの雲の上なら】【果てなき旅】

自然に還る

旅人は、何も知りえない、分からない、ワンガラナイと語り、何もかも捨てて自然に還ろう！と呼びかけながら、自然賛歌の大合唱につながってゆきます。

【ワンガラナイ】(ソマリア賛歌) (福岡正信作詞) 【いろは革命歌】(福岡正信作詞) 【こんなに空が2】

アンコール

蓬萊の国 (徐福の歌) (福岡正信作詞)

おまけ

正信ちゃんに捧げるラブソング

伊予狂い歌 (福岡正信作詞) 伊予市音頭 (福岡正信作詞) 百姓音頭 (福岡正信作詞)

■福岡正信さんの思い出■

彼と幸運もお会いできたのはもう30年近く前のことです。日本の保守的な音楽界の中でドン・キホーテのようなオペラ活動をしてきました私でしたが、「わら一本の革命」を読んで、ここにもこんな人がいたのか、とどんなに勇気づけられたかしれません。正信さんは「なぜオペラのエドワードさんが私に興味を持たれるのか？」とかえって面白がられて私とお会い下さったのが、きっかけだったと覚えています。彼を利用しようとして近づくと人をあの頃警戒していらっしやったからです。まあ、農とは関係ないオペラのエドワードが何しに来たのか会ってみようと思われたのでしょうか。

その後、いろいろなことが起こりましたが、私が前ローマ法王ヨハネ・パウロ二世とお会いできることになったときも、彼の名著「わら一本の革命」の英訳本を手渡すことまでさせて頂いたり、彼が早稲田大学の大隈講堂で講演会をされたときも、私をパネラーと呼んで頂き、ついでに「ワンガラナイ(原題:ソマリア賛歌)」他何曲かを歌わせていただいたことを懐かし思い出します。当会の新宿事務所にも何度もいらっしやいましたし、当会の伊豆の合宿所に泊まりにいらっしやったこともあります。逆に私が伊予の山小屋に泊まらせて頂いたことも何度もあります。

私のオペラ人生の一生のテーマは「自然に還る」ということですが、私に何かを感じてくださったのか、正信さんには当会の顧問にもなっていただきましたし、私の台本の内容についても何度も話し合いました。私も、彼の素晴らしさを広く分かって頂くとう羽田孜元総理に紹介したり、中国大使館に彼の粘土団子による緑化を推薦してご紹介したこともありました。思い返せばいろいろあったんですねー。

また「エドワードさんは何の為にオペラをするんですか？」と正信さんが訊ねられたときは、「みんなと楽しむだけです」と答えていた私がいま。彼としては、自然農法に飛び込んでこない私に一抹の寂しさを感じていたのでしょうか？彼の最後の作品？となった「いろは革命歌」について、正信さんは「これが役に立つのか役に立たないのか、どう思いますか？」と何度も聞かれたのですが、「役に立っても立たなくてもいいじゃないですかー」と答えかけて、遂に声には出せませんでした。

そう言えば、こんなことも仰っていました。「いろんな人がわしの所に来たが、結局弟子は1人もできなかった。エドワードさんも同じじゃないですか？」私に本当の弟子が出来なかったと言えそうかも知れません。しかし私に関わった全ての人が弟子、と言えそうだし、私自身がみんなの弟子でもあります。しかし、私は空ですから、どうでも何でもいいのです。弟子、という言葉に重みも感じません。正信さんだって本当は分かっていたはず。誰だって、ちょっと愚痴りたいときもありますよね、僕もそんな時がないとは言えません。軽く笑って下さい。

この際、はっきりさせておきますが、正信さんは「無」とおっしゃり、私は「空」と話します。ご本人にもそう話したことがあります。さて、無と空、どこが違うのでしょうか？それは、トークの中で！

石多エドワード



シンポジウム ゲスト紹介



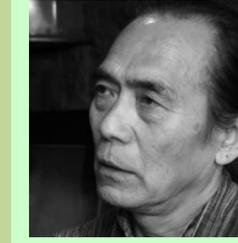
東京オペラ協会代表
石多 エドワード



日本演劇教育連盟全国委員
愛媛演劇集団協議会会長
畑野 稔



福岡自然農園代表
福岡 大樹



自然造形作家
原 秀雄



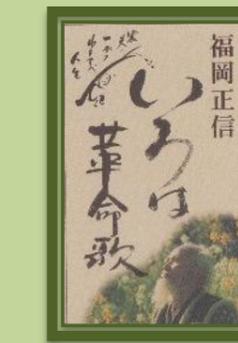
元愛媛有機農産産協理事長
益田 明美



松山消費者団体連絡協議会会長
井谷 カヨコ



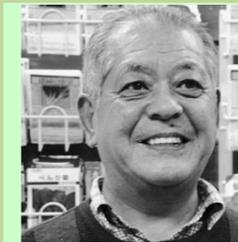
愛媛県議会議員
阿部 悦子



『わら一本の革命』共同英訳者
黒澤 常道



(株)地湧社代表取締役社長
増田 正雄



野口種苗研究所代表
野口 勲



放送ディレクター
金光 寿郎

ビデオレター参加者：小倉浩二、小倉美空、森田賢、関口泰、福岡雅人、福岡梨枝子、福岡大樹、村上洋子、将積睦、石多エドワード、吉井美幸、秦美智世、上田稔、櫻井公一郎、畑野稔、益田明美、井谷カヨコ、阿部悦子、富田佳宏、富田直美、大西道子、鳥居ヤス子、唐沢とし子、青木紀代美、秋好正子、田島三夫、秋山太一、辰巳玲子、黒澤常道、吉田久雄、金光寿郎、野口勲、原秀雄、白子清香、大友映男、増田正雄、石川貴美子、今泉光司、松浦喜英、松浦朋子、高橋知明、森岡尚子、UA、あがた森魚、矢島三枝子、柳沼晋、佐々木義秋、野村美詠子、上岡裕、ルーベン・デルムーロ、福井一恵、他
メッセージ：ベニシア S. スミス、野本公夫、パノス・マニキス、ラリー・コーン、ロサーナ・トシトラクル、ビクター・レイヴァ、ダミアン、ジェイソン・スチュワート、ギエルモ、宮下周平、町田武士、高橋知明、福井一恵、他 (1/28 現在)

福岡正信生誕 100 周年実行委員会：

渥美素子、石多エドワード、上田稔、越智大之、櫻井公一郎、将積睦、西田直人、秦美智世、畠山容平、森田賢、柳沼晋、矢島三枝子、吉井美幸

協力：阿部悦子と市民の広場、今泉光司、NPO 法人東京オペラ協会、大西道子、小倉浩二 & 美空、河野浩巳、櫻井ひろ子、佐々木義秋、(株)地湧社、(株)春秋社、関口泰、田島三夫、永野武宏、野本公夫、福岡大樹、福岡雅人 & 梨枝子、吉田久雄、唐沢とし子、戸谷委代、秋好正子、石川貴美子、青木紀代美

すべてはじまりは、昨年11月の第三週、いまから2か月まえのことだった。石多エドワードさんが愛媛の伊予の福岡正信さんの山の八角堂で、オペラ上演するという。声をかけられ出かける、福岡さんの『いろは革命歌』でオペラが生まれ、と、その日樹園のような「劇場」でオペラがお披露目された。

その後、石多さんのよびかけでその場の有志が、福岡自然農園の「下の倉庫」に集まった。石多さんは、「来年2月2日は一日僕はスケジュールをあけてあります。この日は正信さんの生誕100年の日。この日の前にも後にも100年目の日はありません。この日になにかできませんか。わたしはオペラをうたいますが、みなさんも・・・」

その後、日を待たずとして石多さんから電話があり、「松山市内に会場とれました。生誕100年の集まりの企画をお願いします」と、たちまち風が吹くかにアレヨアレヨと「下の倉庫」組のわれわれは2013年の2月2日にむけ、駆けだした。この石多さんの突破力、がなければこの日は実現しなかった。押しも押されずこの2月2日の発起人は、石多エドワード氏である。感謝したい。また地元愛媛で尽力されたオペラブラザ愛媛の皆さん、とりわけ事務局の秦美智世さんにも。

オペラに続くシンポジウムでお話しいただくゲストは、お声をかけるときみだれ式に増えていった。それでも福岡さんに生前ゆかりのあったひとたちは、さらに各地にいて数多い。なので時間のゆるすかぎり、せめてビデオレターで「福岡さんに贈る言葉」をいただけたらとビデオ取材をしていった。シンポジウムの当日用に、それら「贈る言葉」は編集され、短冊状に細切れだが、それでも四十数名にものぼるひとたちからの思いがまたたくようにも伝わるビデオクリップ集になっていたらと願う。取材に足を運べなかった全国遠くにいるひとたちからは、自作のビデオレターをいただいた。海外からは急ぎメッセージが届いている。

福岡正信さんの言葉の種と実践が、草の実落ちたようにも、各所で・・・次の世代の小草になるかのようにも・・・青草となり生え出ていると実感する。それは草の根となり、それぞれ時に持ち寄りをし、そのときどきにはつながりあう。独占や特権化もなく組織にもならないこのなにものが、福岡正信さんが語りやまなかった、自然が神＝この世のパラダイスに通じるなにかであろう、どうでしょうかとひそかに思う。

福岡正信生誕 100 周年記念実行委員会 矢島三枝子 記